博士学位請求論文審査報告　　平成２７年２月２日

氏　名　吉村　侑久代
学位の種類　博士(文学)
学位論文題目　イギリス生まれの日本文学研究者Ｒ．Ｈ．ブライス研究―足跡と業績―

１．論文内容の特色と要旨

吉村侑久代氏の学位請求論文(論文１３３ページ＋資料３２ページ)は、イギリス生まれの日本文学研究者で、お雇い外国人教師として学習院を始めとする日本の大学で英文学を講じつつ(この点でラフカディオ・ハーンと比べられることもある)、第二次大戦後ＧＨＱの黒衣として天皇制の維持にも関わり、一方で京城帝国大学の外国人教師時代から研究を続けてきた鈴木大拙の著作を通して禅仏教に傾倒し、その禅仏教を背景とした日本の俳句・川柳を英訳して海外に紹介し、アメリカを中心に海外で俳句が普及する礎を築いたＲ．Ｈ．ブライスについて、その足跡をたどりつつ、従来日本でもイギリスでも十分評価されているとは言い難いブライスの業績を再評価しようとするものである。氏にはすでにブライスに関する著書もあるが、今回新たに入手した資料を基に、これまでほとんど注目されていなかった「ブライスと川柳」について、あるいはブライスが仏教徒に改宗した経緯等を論じ、さらには１９５０年代から６０年代にかけてアメリカのビート派詩人に与えた影響及び今日の俳句の世界的広がり、俳句の国際化という状況に大きく貢献したブライスの功績に新しい光を当てようとするものである。

本論文は二部構成で、その第一部は４章から成なり、ブライス小伝、彼の主著と鈴木大拙の禅思想との関わり、彼の俳句観など本論文の主たる研究論考が収録されている。第二部は３章から成り、主としてアメリカにおけるブライスの影響、アメリカの英語俳句運動との関わりが論じられている。以下、本論文各章の内容を概観してみたい。

本論第一部の序章「俳句の国際化」では、今日における俳句の国際化という状況を指摘した上で、英語を始めとする外国語俳句の位置づけを明確にし、ブライスがすでに５０年前に俳句の国際化を予見したその「先見性」を指摘している。

第一部第１章「ブライスの再評価」では、１９９４年にジェームス・カーカップを会長とするイギリス俳句協会が、芭蕉没後３００年(ブライス没後３０年)を記念して出版したブライスについての研究書『俳句の心』（*The Genius of Haiku,* 1994）が日本の俳句や川柳などを西洋に紹介したブライスに関する良き入門書になっていることを指摘し、この本と相前後して出版された国内外のブライス研究書や彼の著作の翻訳書などを紹介して、「ブライスの再評価」についての国内外の流れを論じている。

第一部第２章「ブライス小伝」では、ブライスの出生から、ロンドン大学時代、京城帝国大学勤務時代、そして来日以後、戦後ＧＨＱの黒衣として天皇家や吉田茂などの政治家との関わり、学習院や民芸運動との関わりを通して鈴木大拙、山梨勝之進、齊藤勇、柳宗悦、バーナード・リーチなど、当時一流の文化人や芸術家との交流といったブライスの外交的な一面も明らかにしつつ、他方で禅と俳句と川柳の研究紹介に生涯を捧げたブライスの日本文学の研究者としての足跡を、氏が入手した幻の英文雑誌 *The Cultural East* などの新資料を利用しながら丁寧に辿っている。

第一部第３章「ブライスの主な著書」では ブライスの主著『禅と英文学』(*Zen in English Literature and Oriental Classics,* 1942)、『俳句』(*Haiku*, 1949-52) ４巻、そして鈴木大拙が吉田茂の支援の下に刊行した英文雑誌 *The Cultural East* (1946)を中心に、禅の思想との関わりという視点で論じている。『禅と英文学』では西洋文学の中に禅の精神を読み取ろうとする比較文学的論考であり、『俳句』４巻では芭蕉、蕪村、一茶、子規の４俳人を取り上げ、禅の思想をこれらの俳句に見出そうとしていると指摘している。氏が１９９３年に鎌倉の松ヶ岡文庫から譲り受けた幻の雑誌 *The Cultural East* ではブライスの「禅と俳句」に関する論文を採り上げて、特に禅における「ユーモア」や「無我」と俳句との関わりをブライスが論じているという指摘は、次章「川柳」についての論考に繋がるものであり、興味深い。

第一部第４章「ブライスと川柳」では、日本における初めての英訳川柳についての歴史から始めて、ブライスと川柳の出会い、１９４９年のブライスの英訳川柳集 *Senryu: Japanese Satirical Verse*(『川柳―日本の風刺詩』)、そして１９５０年の吉田との日本語による共著『世界の風刺詩川柳』の出版を通してブライスの川柳観―川柳は笑いと滑稽の風刺詩であり、そこに日本人のユーモアをみる―を論じている。ブライスの川柳翻訳についての研究はまだ十分なされておらず、この意味でも本章はブライス研究に新しい光を当てるものとして高く評価される。

第二部はアメリカにおけるブライスの受容とその影響を研究するものである。第二次大戦後の俳句の海外普及はブライスに負うところが大きい。１９６０年代には多くの若い詩人がブライスの禅と俳句に関する著作の影響を受け、これがアメリカの英語俳句運動と結びついたことを主として考察している。

第二部第１章「ブライスに影響を受けたアメリカの詩人」では、６０年代ビート派詩人ジャック・ケルアック、アレン・ギンズバーグ、ゲイリー・シュナイダーなどと俳句、およびブライスの唯一の弟子でアメリカ俳句の創始者ジェイムス・W・ハケットについて、俳句は禅なりという俳句観を打ち立てた詩人として論じている。

第二部第２章「ジェイムズ・Ｗ・ハケットの世界」では、前章でも論じられたブライスの弟子ハケットの経歴の紹介、俳句およびブライスとの出会い、ハケットの俳句観を論じ、ハケットがブライスの教えの下、創作俳句によって俳句は禅なりという俳句観を確立したこと、更にハケットらの英語俳句によって現代英語俳句の３行詩形が定着したことを

明らかにしている。

第二部第３章「俳句に魅せられた駐日外交官」は、最終章で短いものであるが、本論第二部の趣旨である「世界に広がる俳句」の具体的な例証として、現代における英語圏以外の国における俳句の受容を述べた、前スウェーデン大使ラ―シュ・ヴァリエの講演「スウェーデンとヨーロッパの俳句」(２０１４年５月、大垣市)内容を中心にヨーロッパにおける俳句の受容を検証している。

本論部の結論部に当たる「あとがき」で、氏は世界の俳句詩人に文学的影響を与えた点で、ブライスこそ在日外国人の中でも一番の功労者であろうという。ブライスには、また日本の大学で長年英文学と英語教育に関わった教育者としての一面もあることを指摘し、今後の研究課題として挙げている。

２．論文審査結果の要旨と今後の課題

以上のように本論文は鈴木大拙の禅思想に強い影響を受けたイギリス生まれの日本文学研究者で、日本の俳句や川柳を英訳して海外に紹介したＲ．Ｈ．ブライスについて、第二次大戦後の日本における天皇家や吉田茂などとも関わった政治的一面と、禅や俳句と川柳の研究に生涯を捧げた文学者としての一面を、様々な資料や彼の著作を通して明らかにしている。ブライスについては母国イギリスや日本においてもまだ十分な研究評価がなされていない中で、氏が鈴木大拙ゆかりの松ヶ岡文庫から譲り受けた貴重図書の英文雑誌 *The Cultural East* などの新資料を駆使してブライス研究に新しい光を当てていること、殊に「ブライスと川柳」などのまだ十分考察されていない視点からの考察がなされていることは、今後の日本におけるブライス研究に間違いなく貢献するものであろう。加えて今や世界の俳句ともいえる「俳句の国際化」に氏自身が俳句の国際会議等で貢献していることも評価できる。

今後の課題としては鈴木大拙らの禅思想へのブライスの理解が実際にどのようなものであったか、どのような点で影響を受けているのかを更に深く調べてみる必要があろう。また、氏自身が「あとがき」で述べているように、長年日本の大学で英語教育に関わった教育者としてのブライスについても今後の研究課題にすべきことであろう。

３．口述試験と審査結果

口述試験は平成２７年１月２７日午後１時３０分から４時３０分まで、加藤学外審査委員を含む４名の審査委員により、本論文の内容、日本語表現、英語訳、引用文献の扱い方等細部にわたって長時間の質疑応答がなされた。委員からは引用文献の正確な表記に注意する必要があること等の指摘はあったが、論文の内容については前述したような高い評価を得た。吉村氏は既に平成２５年５月に博士候補者試験にも合格しており、口述試験における的確な応答、本論文の内容についての高い評価から判断して、本論文が本学の学位規則第３条２項に定められた博士(文学)の学位に適格であると判定した。

審査委員

主査　　教授　　鈴木俊次

副査　　教授　　安藤　充

副査　　教授　　田中泰賢

副査　　愛知大学法学部教授(名古屋大学名誉教授)
加藤詔士